

狐に嫁入り

南西

アパートの部屋の真ん中で、私、栗津夏葉は膝を抱えて一人悩んでいた。

自分はいまだこれ五年付き合っている彼に先日プロポーズされ、もうすぐ結ばれる身である。人生の中で一番幸せな時期であるのだから、しかし今の私はどうしてもこのまま彼と結婚していいのか気にせずにはいられない。俗に言うマリッジブルーである。

私の彼氏、大春始善おおはるしぜんは彼の地元にある国立大学を卒業し、顔も悪くなく性格は天然でたまに突拍子もない言動をしますが、さすがに合格点だ。これだけであれば特に不安に思う必要はないのだから、問題は彼の職種かつ家に存在する。彼の家は代々この街にある稲荷神社の宮司を務めている、今はまだ手伝っているだけの彼も将来その職を継ぐ。その稲荷神社は決して小さいというのではなく、年に一度盛大な秋祭りが開かれ街の重要な観光スポットになっているほどの大規模な神社だ。経済的な心配はない。——ただ一つ、どうしても気になることがあった。

出る、のだそうさ。

出るといっても、お化けや悪霊といったおどろおどろしいものではなく、神社の主人である稲荷大明神を代表に、神の使いをしている狐の精霊などといった人間には害を与えない『いい』神様たち、らしい。

「らしい」という台詞から分かる通り、私にはその神様たちが見えない。しかし彼の目にはちゃんと見えているようである。

見える人間の方が圧倒的に少ないから心配しなくてもいい、と彼には言われたが、私の懸案事項はそれである。このまま見ている世界が違っても言える二人が一緒になつて、本当に幸せになれるだろうか？

——そもそもそういった人並み外れた存在がいること自体信じがたいことなのだろう。普通ならそうさ。しかし、一度神社の敷地内にある彼の家にお邪魔した時に、私は見ってしまったのである。

物が宙に浮き、食べ物が一ひたりに消えていくといった

摩訶不思議な現象を。

彼の説明によれば、神社に住む神様は彼の家に自由に入りし、掃除洗濯を率先して手伝う神もいればお供えを頂くと称してお菓子を勝手に食べてしまう神もおり、そういった神様たちの行動が神様を見ることが出来ない私には先に挙げたような風に見えていた、ということらしい。

実際にこの目で人知を超えた光景を見、彼からこの話を聞いて、私はとりあえず神様の存在を信じることにした。我ながら素直、もとい単純であると思う。

仕方ない、惚れた弱みだ。

そう割り切って、私は彼の家が抱える秘密を受け入れた。……つもりでいた。

しかしいざ彼と結婚、という人生最大の選択をした後に、今までとは違い日常的にそういった現象に囲まれるという事実が首をもたげてきたのだ。

「このまま私、やっていけるのかな……」

ぼつりと不安を言葉にしてみる。安心出来るのが、彼の母親もまた私と同じ「見えない」人間であり、「見える」夫と大変仲睦まじく暮らしているということだ。案ずるより

産むが易し、ということわざもあることだし、そんなに気にする必要はないのだろう……と頭では分かっているのだが、マリッジブルーの深淵に落ちてしまった私の思考回路では、どうにもマイナスな方に考えが行ってしまう。

あーもう！自分で自分が嫌になる!!」

アパートなので近所のことを気にして小声で叫んで頭を抱える。こんなことになるのなら、勇気を振り絞って彼の家での同棲を提案するべきだった。こんなんじゃない本当にやっていける気がしない。

そのまま悶々としていると、静かな部屋に突如重低音が響いた。バイブ音の原因であるスマホを鞆から取り出し電源をつけると、メールが一通届いていた。送信元は——件の彼。

明日、よかつたら家に来てくれませんか？無花果いちじくから君に話があるみたいですよ」

「……え？」

一回読んだだけでは意味が分からず、何度も読み返してやっと趣旨が呑み込めた。『無花果』とは確か、彼の家である神社の主神であるお稲荷さんの二つ名だったはず。とい

うことは、どうやら私は彼の家にいる神様から呼び出しをくらったようである。

とりあえず短く『宥かりました』とだけ打ったメールを送信し、私はベッドに身を投げた。

正直ものすごく怖い。話、と一口に言っても色々ある。一体どんな話が私を待ち受けているのだろうか。彼をよろしく頼む」とかならまだしも 君は彼にふさわしくないから別れる」とか今更言われたらその場で泣き崩れる妙な自信がある。

何があるの……」
弱々しく呟いたその言葉は、そのまま部屋の隅に沈んだ。

☆★☆☆

次の日。相変わらず気が沈んだままの私は、仕事もろくに手を付けられず若干の後悔を抱えながらも、メールで彼と約束した通り勤め先を出て神社へ行こうと足を向ける。日はすっかり落ち、空は赤から黒のグラデーションに覆われていた。

しばらく道なりに歩を進めると、目の前にトンネルが現れた。何も考えずにそのトンネルの中に入り……私ははたと気がついた。

彼・の・家・に・行・く・道・に・、今・ま・で・ト・ン・ネ・ル・な・ん・て・あ・っ・た・だ・ら・う・か・？

気づいたその瞬間、いやに冷たい空気がまとわりついて私の体に鳥肌を立たせ、明かりのないトンネルの中に甲高い歪んだ笑い声が響いた。声は壁で跳ね返ってぐわんぐわんと反響しながらも、段々と私がいる方へと近づいてくる。

とっさに鞆を放り出し元来たほうへと踵を返し駆け出しても、数歩しか離れていなかったはずのトンネルの入り口は、今いる場所のはるか先にあった。

自分の身に何が起きたのか分からないまま必死に走るが、笑い声はすぐに追いつき、何かが右足に引っかかり私は地べたに倒れこんでしまった。

うわあっ!？」

慌てて起き上がり右足に目を向けると、何やらどす黒いものが闇の中から伸びて私の足に巻き付いていた。

——つかまえた!

耳元で声が響き、あまりの恐怖に頭が真っ白になる。どうにかしなければとパニックに陥ったせいで変な思考が働き、何故か私は右腕を振りかざす。

「ぜやあああっ!!」

そう叫び振り下ろした右手の手刀は右足をつかんだ黒い何かに当たり、ぎゃあーという声とともに右足からそれが離れていく。同時に周りの風景が手刀のダメージを反映するかのようには揺れ、本来この場所にあるのであるう景色が一瞬間を覗かせる。

すると、垣間見えた本来の世界から何か細長いものがトンネル内に入り込み、私の手元に転がった。よく見てみれば、それは一振りの日本刀だった。

え……なんでこんなのが？」

「体どういことなのかよく分からないが、貴重な武器は持っておこうと立ち上がって刀に手を伸ばし、鞘から刀身を引き抜く。滑らかに鞘から飛び出したそれは、凜とした空気を携え、周りの激んだ空気を押しつけるほどの風格を持っていた。

が、次の瞬間ズキリと頭が痛み、視界が歪む。目に手を

当て何度も瞬きをしてピントを合わせてみると——今までとは違う風景が視界に広がった。

トンネルの中にはまだいるが、明かり一つないはずなのに驚くほどクリアにトンネルの端から端まで見通せる。十メートルほど前方を見れば、人の影によく似た「何か」が地べたを這うようにうずくまっていた。あれが妙な現象の犯人らしい。

不意に、私の頭の中に声が響いた。

『ずまんがしばらく体を借りるぞ。悪いようにはしない』
先程の甲高い声とは違う、低く厳格な男の声。

は？何言つて……？』

『お前に取り憑いたということだ。まず口を閉じろ、来るぞ』

『うわあっ!!』

訳が分からず呆然としている私に、影が飛びかかってきた。それに対し右腕が私の思考を無視して勝手に動き、手にした刀が影の右腕を薙ぐ。

影の悲鳴がトンネル中に反響し、手刀より強いダメージを負ったせいかトンネルそのものが消え去った。現れたの

は神社への近道である山道。どうやら私は本来この道にいたようである。

再び男の声が頭の中に湧いてくる。

色々と話したいことがあるが、まずはあいつを倒すぞ』

…了解。私は何かするべきなの？』

俺がお前の体を動かすから、されるがままになつてくれ』
すごい不安だけど、分かった』

脳内の声と会話しながらも、私は右腕を押さえ苦しそうに呻く影へと少しずつ近寄っていく。

この娘は我が主の御孫の許嫁だ。無闇に触れるのはこの俺が許さん』

不意に、私の口からそんな言葉が零れた。

逢魔が時に現れ、女子の血に惹かれた悪霊よ。これ以上、この地を荒らすな。一度とこの街に現れないというのなら見逃してやろう』

私の口から勝手に出てくる言葉を聞いた影は、頭だと思われる部分を何度も縦に振りそそくさとその場を離れる。茂みに消えた影を見送った私は、先程投げ捨てた鞆を拾おうと後ろを向いた。

その瞬間、背後の茂みが激しい音を立てて揺れ、先程の影が隙ありとばかりに私に飛びかかってきた。

それくらい見通している』

私に憑いている男はあらかじめ予想していたのか、瞬時に振り向いた私の体はまだ鞆に納めていなかった日本刀をしっかりと握り、襲い掛かってきた影を一太刀で斬り払った。

影の断末魔が森に響く。真つ二つに斬られた影は、そのまま夜闇に溶けるように姿を消した。

『…片付いたな。では少し、俺について話すか』

私の口を借りて溜息を吐いた男の声は、自身について語りだす。

俺はお前の許嫁の祖父を主とし、主一家が官司を代々務める稻荷神社に仕える日本刀の付喪神、名をコブシという。俺の話聞いたことはあるか』

うん、始善君から何度か。神社を守る役目に就いてるとか』

なら話が早い。神社の近くに悪霊が出たことを仲間が感知し、追い払おうとここに来たところお前が悪霊に襲われ

ていたため、倒すために取り憑かせてもらった。お前を守るためとはいえ許可も取らず暴挙に出てしまい、申し訳ない
『い』

「ちらこそ、助けてくれてありがとう。……で、話の腰を折ってしまって申し訳ないんだけど、早く神社へ向かわない？　……で立ち話もなんだし、大分暗くなってきたし」
「それもそうだな……では、一度お前から出るか」

そう言いながら男もといコブシさんは、自身を鞘に戻す。

『……ん？』

「私から出る」と言っただけなのに、私の脳内からコブシさんの声は消えず、先程まで落ちていた声に焦りの色が混じる。

『……戻れん。どういふことだ？　……まさか！』

暫くぶつぶつ呟いていたコブシさんは、何かを思いついたのか急に神社へと私を走らせた。

「ちょっと！　鞆置いたままなんだけど!!」

「櫻で狐達に取りに行かせる！　とにかくそのまま神社へ走れ！」

慌てたコブシさんの声に急かされ、私は神社の鳥居をく

ぐった。

☆★☆☆

神社の本殿の裏手にある離れ……彼の家にたどり着いた私は、呼び鈴も鳴らさず玄関の引き戸を開けた。

「おや、夏葉様がお見えになりましたー」

玄関近くで私を待っていたらしい一匹の狐が、廊下に向かって声を張り上げる。先程から何となく気が付いていたが、コブシさんに取り憑かれている状態の私は、人ならざるものが見えるようだ。

そのまま立ち去ろうとした狐を、コブシさんは私の口を借りて呼び止めた。

「待て狐！　俺だ、コブシだ！」

「……？　コブシさんなのですか、どうしたのです？」

「今すぐ始善と幣六を呼んでくれ！　緊急事態だ！」

「……その心配はないよ。コブシ、一度落ち着いて」

廊下の曲がり角から始善君と神主姿の男性——恐らく大幣の付喪神である幣六さん——が現れ、慌てているコブシ

さん（私）に冷静になるよう声をかける。

悪霊を斬るために、夏葉さんに憑依したんだね。まさか、その様子だと……出られなくなったのかい？」

その通りだ」

荒い息を整えながら、ユブシさんが答える。

剣道をしていると聞いて憑依したんだが……どうやら憑依するのに適性があり過ぎたらしい。魂が癒着し始めていくようだ……幣六、お前の力で俺を引き剥がしてくれないか」

「分かった！」

急いでやろう。じゃないと夏葉が危険だ」

ああ、頼む」

衝撃の事実を口にしたユブシさんに、更に大変なことを言い出した彼。予想外の事態についていけない。

え……私死んじゃうの!？」

今のは夏葉の言葉だね。大丈夫。ユブシと夏葉の魂の波長がよく似ていたせいで魂が混ざりかけているのを治すだけ。すぐにやれば命に関わる事態にはならないよ。……ごめんね夏葉。悪霊に襲われたばかりなのに、更に怖がらせ

るようなこと言ってるよ」

そう言ってる私を安心させようと笑った彼だが、すぐにやれば」ってそれ、手遅れになったら死ぬってことじゃないか。正直安心なんて出来ない。

正式な手順は踏めないけど、やれる？ 幣六」

勿論。まあさすがに玄関先でやるつもりはありませんが」

色々相談しながら二人は近くの客間に私を連れていき、部屋の真ん中に私を座らせた。玄関先で事情を聞いていた狐が手際よく部屋を清め、幣六さんが一瞬で彼の本来の姿であろう大幣に戻る。それを彼が手に取り構え、左右に振って祝詞を唱える。

掛まくも畏き 伊邪那岐大神 筑紫の日向の橘の

小戸の阿波岐原 禊祓へ給ひし時に成り座せる祓戸の

大神等 諸々の禍事 罪 穢有らむをば 祓へ給ひ

清め給へと白す事を 聞食せと 恐み恐みも白す！」

大幣を中心に目を開けられないほど強い、暖かい風が吹き荒れる。その風にあおられると、私の体から何かが抜けていったかのような虚脱感に急に襲われた。バランスを崩し畳の上に手をつくすと、その拍子にどうやっても右手から

離れなかった刀がボロリと手から零れ落ちた。

よかった、成功だ。夏葉、大丈夫？」

うん……なんか、疲れた……」

自分の周りだけ重力が大きくなったかのように体が重い私を抱き起こした彼にそう答えるのがやつとで、指一本動かすのもだるい。

「……すまない、世話をかけた」

直接頭の中ではなく鼓膜に響く形でユブシさんの声が聞こえ、その方向へ目を向ける。そこには和服姿の男性が、刀が転がった場所にぐったりと座りこんでいた。

あの人が……ユブシさん？」

何も考えずそう呟くと、彼の顔色がさっと変わる。再び人の姿になった幣六さんも顔を強張らせた。ユブシさんに至っては真っ青になるほど顔から血の気が引いていく。

「……夏葉、ユブシの事、見えてるの？」

うん……あれ？」

そう言われてみると変だ。ユブシさんに取り憑かれるまで、私は神様の姿を捉えることは出来なかったのに。今はユブシさんが離れても幣六さんや狐も見えたままだ。

「しまった、後遺症かな」

夏葉さんの体に、僅かにユブシの力が残ってしまったようですね」

俺は……重ね重ねなんてことを……！」

ユブシ、今のところ神霊が見えるようになったけどみただし、そんなに責任を感じる必要はないよ。でも……どうする夏葉？ 治したい？」

彼にそう聞かれ、私は自分の身に起こったことを頭の中で反芻する。

彼と同じように、私も神様たちが見えるようになった。

それはつまり……思わぬ形で、彼と結婚するにあたっての悩み事は解決されてしまったのだ。

彼と同じ世界を共に生きることが出来る。これほど嬉しいことはない。

ううん。これで始善君とちゃんと、肩を並べて歩いている気がするから。……このままでいい」

「……わあ」

我ながら恥ずかしいことを言ったもんだと思ったが、彼が顔を真っ赤にしてうつつむいたので余計こちらが恥ずかしい

くなってくる。

そのまま気まずい空気が流れ、誰も何かを言い出せないでいると、

夏葉ちゃん、ちょっといい？」

突如廊下から誰かにそう言われ飛び上がるほど驚いてしまう。客間の入り口へ顔を向けると、六歳くらいの見た目の少年が一人立っていた。少年と言っても、頭からは狐に似た耳が飛び出しているし、腰には触り心地のよさそうな尻尾。明らかに人間ではない。

僕が無花果。君には何度か会ったことがあるけど、こうして僕の姿を見てもらうのは初めてだね、よろしく」

部屋に入ってきた無花果さんは、私の前にすとんと腰かけた。

「こうして君と話すにあたって筆談でもしようかと思ってたけど、僕らが見えるようになったのなら話が早いや。始善、ちよつと席を外してくれない？ 幣六やユブシも疲れてるでしょ？ もうすぐ夕飯らしいから、そっち行つて」

うん、分かった」

無花果に従い部屋を出る彼やユブシさんたち。それを見

送った無花果さんは、一つ溜め息をついて口を開いた。

☆☆☆

まずは……君に謝らなきゃねえ。わざわざ呼び出した筆句その道すがらで悪霊に襲われるなんて……予想していなかったとはいえ、呼び出したせいで怖い思いさせてごめんね」

「まあ、確かに怖かったですけど……大した怪我もしませんでしたし、大丈夫ですよ」

「そう？ そう言ってくれるのは嬉しいけど……」

申し訳なさそうにそうこぼす無花果さんにさらに言葉を重ねる。

「だって悪霊に襲われたからこそ、ユブシさんが私に取り憑いた結果私が神様の事を見ることが出来るようになったわけだから、もしそうじゃなかったら今私、こうして無花果さんと話せていません。それに——」

一旦そこで言葉を切り、今まで抱えていたわだかまりを明かしてみる。

見えるようになったからこそ、私、彼と一緒に生きていける自信がついたんです。彼のことは好きだったけど、いざ結婚となるとこの家でちゃんと生きていけるかなって不安で……ついさっきまでうじうじ悩んでいたんです。だから、これでいいんです」

「……ぼくが言うのもなんだけど、始善と結婚するのが君でよかったよ。うん、君には感謝してる」

そう頷いた無花果さんは、私に頭を下げた。

始善を愛してくれてありがとう。始善を……生涯連れ添う相手として受け入れてくれてありがとう」

そんな。むしろ私こそ、会ったばかりの彼に無理して交際を頼み込んだじゃって……」

私と彼のなれそめは、少々変わっている。大学生時代、彼の鞆を盗もうとしたひったくり犯を、たまたま剣道部の練習から帰る途中だった私が持っていた竹刀でぶん殴って捕まえたのが、彼との出会いである。

その時ちょうどクリスマスシーズン真ただ中で、独り身であることにコンプレックスを抱いていた私は交番での聴取のあと夜道を送ってくれると言い出した彼に好意を感じ

じ、半ば無理矢理連絡先を交換したのだ。

だからむしろ私こそ、唐突にアタックしてきた私を受け入れてくれた彼にお礼を言いたい。

確かに最初はそうだったかもしれないけど、始善、小さい頃から神社の生まれなのを同級生にからかわれたりして友達と呼べる人が少なかったんだ。好きになってくれる人なんて当然いなくて。だからさ……始善の秘密を知っても嫌いにならずにそばにいてくれた君は、始善は勿論僕らにとっても、大切な存在なんだ。ぼくらはこれから『家族』になるんだから、余計ね」

家族、ですか」

そう」

私の目をしっかりと見つめ、無花果さんは笑顔で続けた。さすがにかしこまった祭事の時とかはしゃんとするけどさ、ぼくは神様だからって人間に偉ぶったりしたくないんだよね。だからぼくは宮司一家の事は家族だと思ってる。人と神だけど、ずっと一緒にいるんだから。そして新しく家族になる君に、ここに住んでいる神様を代表して一度ちゃんと挨拶をしておきたくってね。こうして呼ばせてもら

ったんだ」

「ここでやっと、無花果さんが私を呼んだ理由が理解できた。無花果さんは、私を新しい家族として迎える準備ができていることを伝えておきたかったのだ。

「これから、よろしくね」

「……はい！」

無花果さんの気持ちを知り、そこにある新たな家族である私への思いを胸に受け止め、私は力強く頷いた。

☆☆☆☆

「……やれやれ、久しぶりに真面目な感じで喋ったから、おなかすいちちゃった。そろそろ夕飯が出来るころだし、夏葉ちゃんも台所行こう！ごはんごはん！」

「へ？……あ、はい」

話が終わった直後、急に先程の神様然とした雰囲気が消え、まるで子供のように無邪気に誘う無花果さんの劇的な変化に呆気にとられる。こっちが……普段の様子なのだろうか。

台所につくと、そこには彼とその両親の他に、今までに見たことがない数の狐や神様たちが私たちを待ち構えていた。

話は済んだみたいだね。じゃあみんなでご飯食べよう」

夏葉さんはここにどうぞ！ 始善の隣に」

我々狐ども、夏葉様のために稲荷寿司を用意させていただきました！ ささ、どうぞ召し上がってくださいませ」

「……」

圧倒されるほど部屋いっぱいにあふれる神様たちを見て今、気がついた。

——これ、見えるようになったらなっただで大変じゃないか？

でも……神様たちに囲まれている彼はとても幸せそうで、そんな彼を見るとこっちも幸せな気分になってきて。

だからきっと、これからも幸せにやっっていけるんだろう。

私の視線に気が付いてこちらを見た彼に私は、にっこりと笑みを返した。

終